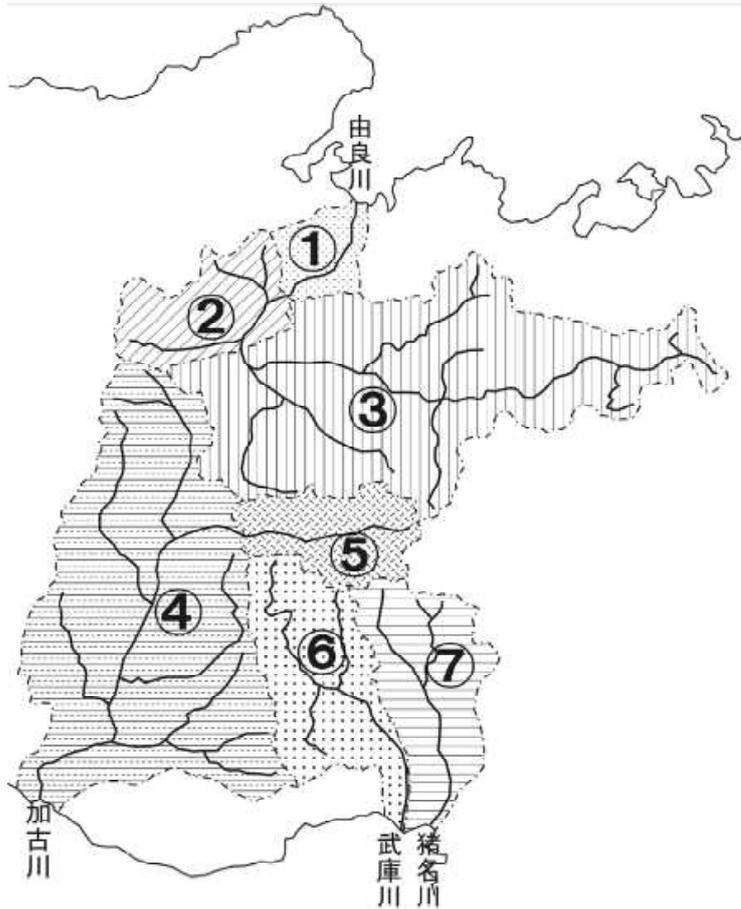


兵庫県の主要河川には 他県と違った大きな特徴があります。兵庫県は北は日本海、南は大阪湾・瀬戸内海に面し、河川もそれぞれ南北に注ぎます。各河川の源流部においては比較的標高が低く、流れは概ね緩やかです。このような地勢においては、凄まじい河川争奪が繰り返されてきました。「流れが緩やかなこと」と「川床の上昇や山間部の浸食」などにより、堆積物が川を堰き止め、流路が変わって別の川に流れ込んでしまう現象です。20万年前には小河川に過ぎなかった由良川は、加古川の上流部と中流部を奪取、流域面積を20倍以上拡大しました。その一方で加古川の流域は、ほぼ半減しました。加古川の25分の1の規模だった由良川は、現在では加古川を上回る大きな河川になっています。一方、武庫川は上流部を加古川に奪われています。このような河川争奪による大幅な変遷は、他県にはほとんど類を見ません。



16 由良川・加古川・武庫川・猪名川流域の7分割。
点破線は現在または過去の分水界を示す。①から⑦はこれら4河川の流域を分割したものであり、①+②+③が現在の由良川水系、②+③+④が現在の加古川水系、⑤が現在の武庫川水系、⑥が現在の猪名川水系に属する。4河川の河川争奪による流域面積の歴史的推移については第1表ならびにその説明文参照。

生態系への影響

河川の変遷は、生態系にも影響がありました。由良川上流部に棲息するミナミヌマエビは河川争奪による地理的隔離によって、中流部のミナミヌマエビとは違う遺伝子構造を持つに至ることが最近の研究でわかってきました。同じく相野川と武庫川の河川争奪においても、メダカの遺伝子構造に相違性をみるようです。(以前、中国産ウナギを国産と称し偽装出荷、DNA鑑定によって明らかとなった事件がありました。生育環境によって遺伝子構造が違って進化や分化します) 河川争奪は、生き物の育成環境や遺伝子構造の変化をとともなうものと言えます。

(左の図表は「武庫川散歩」より転載)

	20万年以上前	20万年前	2万年前	現在
由良川	142 km ² ①	435 km ² ①+②	1,950 km ² ①+②+③	1,950 km ² ①+②+③
加古川	3,370 km ² ②+③+④	3,092 km ² ③+④	1,562 km ² ④	1,839 km ² ④+⑤
武庫川	?	?	774 km ² ⑤+⑥	498 km ² ⑥
猪名川	?	?	?	434 km ² ⑦

表1 河川争奪による由良川・加古川・武庫川・猪名川の流域面積の推移。
これら4河川は、20万年以上前から流路の争奪合戦が繰り返され、流量長・流域面積が変化し、現在に至っている。由良川は、20万年以上前は、流域が①(第4図参照)に限られ、若狭湾に注ぐ小河川にすぎなかったが、かつての加古川の流路を奪い取り大きくなっていった。加古川は2万年前に往時の大きさの半分以下になったが、2万年前この武庫川との流路の争奪合戦に勝利し、かつての武庫川上流部(⑤の部分)を奪い取った。



河口に現われるカモメたち(河口)



シベリア渡来のコブハクチョウ(宝塚市役所前)



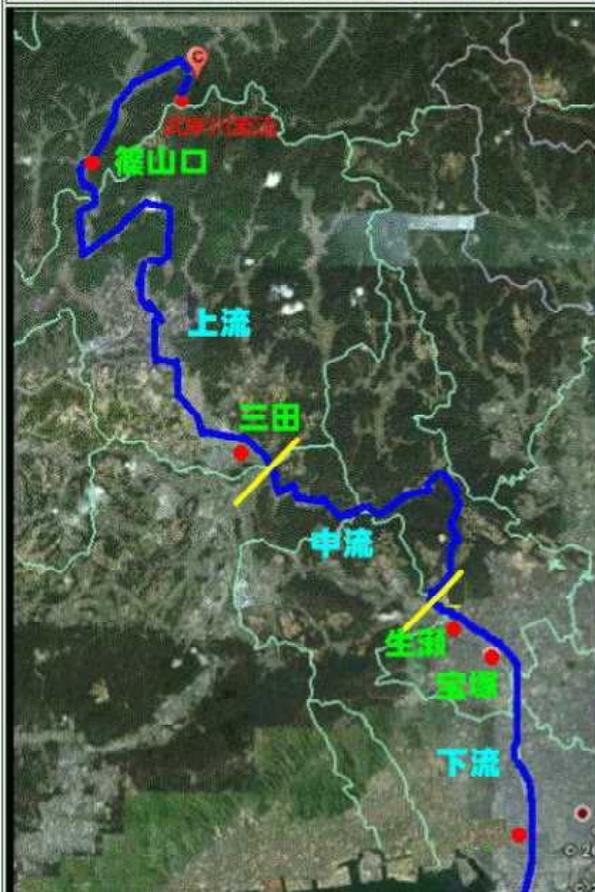
カルガモの家族(仁川合流点)



群れをなすカワウ(阪急線 鉄橋下)



ダイザギ(両端)とコサギ(真ん中)(報徳学園前)



武庫川の鳥100種 武庫川に生息する野鳥100種 (主な生息域 上流部 ● 中流部 ● 下流部 ●) 留鳥や夏鳥、冬鳥のほか、旅鳥(渡り)の途中に一時的に滞在する鳥も含む。

カワウ ●	イシギ ●●●	ゴブハクチョウ ●	ミソ ●●●
カルガモ ●●●	ミヤマガラス ●	バン ●	シロチドリ ●
ハクセキレイ ●●●	ツバメ ●●●	コガラ ●●●	ビタキ ●
ビ ●●●	ヒヨドリ ●●●	セグロセキレイ ●●●	ハマシギ ●
カワラバト ●●●	イノボドリ ●	キセキレイ ●●●	バリケン ●
キジバト ●●●	カムリカイツブリ ●	ルビタキ ●	イカルチドリ ●●●
ヒバリ ●●●	カイツブリ ●	エナガ ●	ヤマセミ ●
カワラセウ ●●●	ミカイツブリ ●	ヤマガラス ●	ウグイス ●●●
スズメ ●●●	ダイサギ ●●●	ホオジロ ●●●	ハイカ ●
ハシボソガラス ●●●	チュウサギ ●●●	アオジ ●●●	コシアカツバメ ●●●
ハシブトガラス ●●●	コサギ ●●●	ベニマシロ ●	イツツバメ ●
ササゴイ ●●●	アオサギ ●●●	カワセミ ●	ハチクマ ●
ムクドリ ●●●	ミスゴ ●●●	コチドリ ●	カッコウ ●
ホシハシロ ●	ミコアイサ ●	モズ ●	ハヤブサ ●●●
キンクロハシロ ●	ヒドリガモ ●●●	アメリカヒドリ ●●●	ノスリ ●
キアシシギ ●●●	オナガガモ ●●●	ゾリハシシギ ●	チョウゲンボウ ●●●
チュウシャクシギ ●	オカヨシガモ ●●●	オオジュリン ●	クリシギ ●
コアジサシ ●	ハシロガモ ●	コムクドリ ●	タンギ ●
ユリカモメ ●	スズガモ ●	クイナ ●	カワガラス ●
カモメ ●	ゴモ ●●●	セッカ ●	オオモシキリ ●
セグロカモメ ●	オシドリ ●●●	効アシギ ●	サンコウチョウ ●
オオセグロカモメ ●	ウミアイサ ●	タヒバリ ●	アオガラ ●
サビタキ ●	オオバン ●	ツグミ ●●●	ショウドウツバメ ●
ハチジョウツグミ ●●●	シジュウカラ ●●●	ヒメジヤク ●	ダイゼン ●
メダイチドリ ●	アマサギ ●	ホオアカ ●	キレンジャク ●

↑ 武庫川の野鳥100種 作成の参考文献☆武庫川ダム環境影響評価調査 ☆武庫川周辺国勢調査 ☆私の野鳥日誌@宝塚(<http://202.217.72.80/kappa1511/arcv>) ☆日本で見られる野鳥287種判別のポイント(真木広造・長岡書店) ☆Wikipediaフリー百科

自然保護と生態系

生態系の変化は遠い昔だけでなく近年にもみられます。10年ほど前には見かけなかったカモメは、近年は武庫川河口付近にその姿を現します。最初に現れたのはユリカモメですが、最近では、オオセグロカモメやセグロカモメも見受けられます。冬季の朝方においては、河口付近から国道2号線武庫大橋付近まで北上し、夕刻までには海岸に帰るようです。気がかりなのは、ユリカモメにパンや菓子などあげて楽しむ人々の光景です。他のカモメは警戒心が強く寄ってくることはありませんが、ユリカモメは人馴れしていて直接餌をもらうだけでなく、ごみ箱や生ごみをあさって散らかしてしまいます。人間だけでなく鳥たちの生活にもよくありません。観察や野鳥愛護のために餌場や餌台を設けて野鳥を寄せる活動も慎重を期します。餌の少ない冬場に限定して少量に留めるべきと私は思います。

年々自然保護の意識が高まり様々な施策が行われていますが、他にも思いもよらない反作用もあります。農薬の多量使用でドジョウなどの小魚が姿を消しつつあった時期には、それらを餌とするカワウは激減し全滅寸前まで追い込まれました。しかし、もともと繁殖力が旺盛なこの鳥は、農薬の使用が制限され水路や小川に小魚が復活したのと同時に、その数を飛躍的に増やしました。数百、数千羽のコロニー(集団野営)で暮らす琵琶湖のカワウは勢力を伸ばし、近畿一円のみならず中国地方まで飛来しその地で定住しました。武庫川においても飛来当初は下流に限定されていましたが、最近では中流まで進出しています。カワウの糞は強酸性で、付近の樹木を枯らしてしまいます。おびただしい数で集団野営しますから、その被害は大きいです。自然保護、環境浄化が、別の自然破壊を招いているのは皮肉なことです。野生のシカが繁殖しすぎて畑の収穫物を荒らすニュースはよく耳にしますが、同じようなことが私たちの身近でも起きているのです。(ちなみに長良川などの鶺鴒の鳥はウミウです)